

少女が看取る

ばあちゃんの旅路

琵琶湖の東側に開けた滋賀県東近江市。その山沿いにある甲津畑という集落。畑仕事が好きだった92歳の曾祖母を、小学5年の女の子が見送った。

写真家 國森康弘

もう、これいらん。

92歳の竹子さんは、自分で入れ歯を外した。亡くなる1週間前のこと。それから、食べるのをやめた。

食事、生活のリズムといった健康管理から小物の整理まで、とにかく自分のことはいつもきっちりしていた。病院にかかることは、ほとんどなかった。少々値がはっても漢方薬を好み、心身のバランス調整と内に宿る治療力を大切にしていた。

ここ数年は、さすがに体力が落ち、物忘れもするようになっていたが、それでも早寝早起きを貫き、畑には毎日出かけていた。

小学5年だった恋ちゃん、一緒に暮らすこのひいばあちゃんが好きだった。悪さをして誰かに叱られても、竹子さん

けは決して怒ることはない。部屋に遊びに行くたび、いつの間にか買ってきてくれるのか、何かおもしろいお菓子をくれる。「絶対的味方」の存在だった。

「おおばあちゃん、行ってきますー！」

「ただいま。今日、学校でねえ……」

竹子さんに声をかけると、必ず笑顔を見せてくれた。毎朝毎晩のあいさつも交わしてきた。

いつものように「おはよう」と声をかけに行こうとしたら、夜中に息を引き取った、って聞かされた。

ついでにかいがかへ

あんなに元気だったひいばあちゃん。ここ1週間くらい寝込んでいたから、様子が違うとは思っていた。何か寂しいこと、

悲しいことが待っているかもしれないと、心の隅で予感もしていた。

でも、いつの間にかそこへ行っちゃうなんて……。まだちゃんとお別れしていない。「ありがとう」って伝えてない。「さよなら」なんて言いたくない。

曾祖母の死に向き合う少女恋ちゃんの物語を、写真絵本シリーズ「いのちづくみとりびと」(農文館、全4巻)の第1巻「恋

ちゃんをはじめでの看取り」として刊行した。このシリーズは全

巻、滋賀県東近江市の東に位置し、高齢化率の非常に高い水源

寺地域を主な舞台にしたノンフィクションである。

第2巻は一人暮らしで認知症を抱える「ナミはあちゃん」の旅立ちの物語。第3巻では高齢者や末期がん患者ら「人」その

ものに寄り添い、住み慣れた場

での「生活」を最期まで支える

往診医、花戸貴司医師たち専門職の活動を追った。第4巻は形

や背景、経緯はそれぞれ違えど、あたたかい看取りを通じて命の有限性と継承性を身をもって教えてくれた九つの家族の「命のバトナリレー」を描いている。本書には、死んだ人が写って

「よかった」——。安らかな竹子さんの「寶篋」を見て、みんなが笑顔になった



いる。正面から死を捉え、数々の看取りを写し込んだシリーズは、この世に例がないだろう。まして、子どもに読んでもらえる写真絵本という形は、物議を醸すかもしれない。

「生」の中にある「死」

ただ筆者は、当たり前前にそこにある「生」の中の「死」と、



大好きなひいばあちゃんにお別れ。「ずっと優しくしてくれて、ありがとう」

日常生活の中にある別れを撮ったにすぎない。とても自然な行為だと思っている。

厚かましくも、これまでずっと、人にレンズを向けてきた。人は致死率百パーセント。だからこそ、ほかの生物と同様、種の保存のために自らの遺伝子を埋め込んだ子孫を残し、「命」をつないでいく。

死はまさに生の一部であり、おのおのの人生の達成であり、本人にとって最後の大舞台である。人は生まれた瞬間から死に向けて一歩ずつ歩むのだから、「人」を撮り続ける以上、必ず「死」に出会う。

イラクやソマリアなどの紛争地でも、野宿労働者が行き倒れる大阪・釜ヶ崎でも、東日本大震災の被災地でも「死」があった。家族が別れと感謝を交わせない、あたたかい看取りができない、命のバトンを渡せない、天寿を全うできない、「悲しい死」を目の当たりにした。

涙の中に笑顔が

いかに死ぬか……。生活してきた家で、愛する者に寄り添われながら、穏やかに息を引き取りたいという人が、統計上でも経験上でもダントツで多い。

看取りの場で、そんなあなた



七五三のとき、竹子さん、兄・大星君と。「命のバトン」は受け継がれていく

かい死を撮らせてもらえることに感謝と幸せを感じる。悲しいだけの死では、つらすぎてシャッターが押せない。でも、写真絵本の中の人たちは、あくまで自然で、穏やか。涙の中に笑顔があった。

息を引き取る。その舞台は、出産場面と同じように、ありつたけの生命力と愛情を引き継ぐ

場だった。高揚感や充足感、生命感があふれた。尊い空気を壊さないように、シャッターを押さないことはある。でもそれは、「つらいから」ではなかった。介護施設、悲憤感、苦痛、不吉といった先人観は見事に覆された。

映画「おくりびと」は、死後に亡き人を尊敬をもって送り出す所作が美しく印象的な作品だ

が、この「みとりびと」の看取りは、死ぬ瞬間そのものと、さらにそのずっと前からの「旅立ち」に向けた覚悟と準備、そして日常生活の中で交わしていく別れと感謝や、残された家族の笑顔の涙まで、その自然な営みを広く含んでいる。だから何年も通わせてもらっているご家庭もある。

足をさすりキスをした

会うたびに、前に撮った写真を本人や家族に渡す。部屋にどんどん飾っていつてくれる人、撮影の前日には美容師さんに来てもらおう人、遺影に使ってくれた人などさまざま。何より多くの人が、写真を「看」にして、来るべき「最期」をどう迎えたかを家族で話し合おうきっかけにしてくれていることは嬉しい驚きだった。写真絵本を見た人から、

「うちのばあちゃんを撮ってくれ」という依頼も増えた。

出版社の営業担当者が小学校に絵本を持っていくと、

「これを教材にして、児童にどう教えたらいいか分からない」と途方に暮れる教諭がいるそ

うだ。だが、何も教えなくていい。ただ子どもたちが自らべー

ジをめくり、五感と第六感をもって感じてくれれば、もう十分だと思おう。

おばあちゃん、おじいちゃんたちは写真の中から、ずっと語りかけている。大切な何かをきつと教えてくれる。

小学生へのさまざまな調査によると、3割前後の児童は「人は死んでも生き返る」「命はリセットできる」と思っているという。カブトムシが死んだら「明日スーパードで買ってきてあげると答える大人。クワガタが死んだら「お母さん、電池交換して」という子ども。「人は死んだらどうなるか見てみたかった」と人を刺し殺した少年……。

恋ちゃんの学校でも、5、6年生の3割ほどが「命はリセットできる」と考えていた。でも恋ちゃんの答えは違う。「人は死んだら、冷たくなって二度と生き返りません。でも、おばあちゃん私は私の心の中で生き続けています」

恋ちゃんは冷たくなっていくひいばあちゃんのおでこに触れ、手を握り、足をさすった。話しかけて、また話しかけて、キスをした。長い時間をかけて、お別れをした。「私もおばあちゃんみたいに、優しいおばあちゃんになれるかな」